

イエス・キリストは実在したのか？

レザー・アスラン 著、白須英子 訳



■ 評者

小原 克博

(同志社大教授)

過去20年の間、歴史上の人物と

してのイエスを扱った、いわゆる史的イエス研究に関連する本が続々と出版された。そこで描かれる斬新なイエス像は学問世界にとどまらない関心を喚起することになり、「イエス・ルネサンス」とまでいわれるほどの盛況ぶりを見せた。本書も、そうした流れに属する一書である。

「世界宗教」への変質を描写

類書に親しんできた読者には、なじみの議論も多くあるに違いないが、はじめて、この種の本に接する読者にとっては、これまでの研究の成果をわかりやすく総覧できるといふ利点がある。しかし、本書は類書にはない独自性をも有している。それは、著者がイスラム教徒であるとして米

国で話題になった以上の、注意を払うべき問題提起を含んでいる。

本書は3部で構成されている。

第1部は、歴史上のイエスに肉薄するために、彼が生きた時代の社

会的・宗教的・政治的な背景を明確にしている。その上で、第2部は、実際のイエスが、凡庸な平和主義者のイメージには到底収まりきらない、当時の支配体制にあらがったユダヤ人革命家であったという実像を浮かび上がらせようとする。

ここまでは類書にも見られる構造である。だが、本書の最大の特徴は、第3部において、イエスの死後のキリスト教成立を扱い、その過程で実際のイエスの行為や教えがかき消され、あるいは強調点がずらされ、当時の地中海世界に適合した「世界宗教」へと変質させられたことを説得的に描写している点にある。

著者によれば、それはイエスの継承者で弟のヤコブと、生前のイエスを知らない宣教師パウロの対立、そして前者の共同体の消滅によって引き起こされた。

聖書の伝統的な読者は本書の内容に違和感を覚えるに違いない。しかし、その違和感を手掛かりとして、世界宗教としてのキリスト教に秘められた別の可能性を想像することは、今の時代にふさわしいことではないだろうか。